



龍
子
文集
皇
年
撰



~ 5
2195



明八利五
2/95
卷

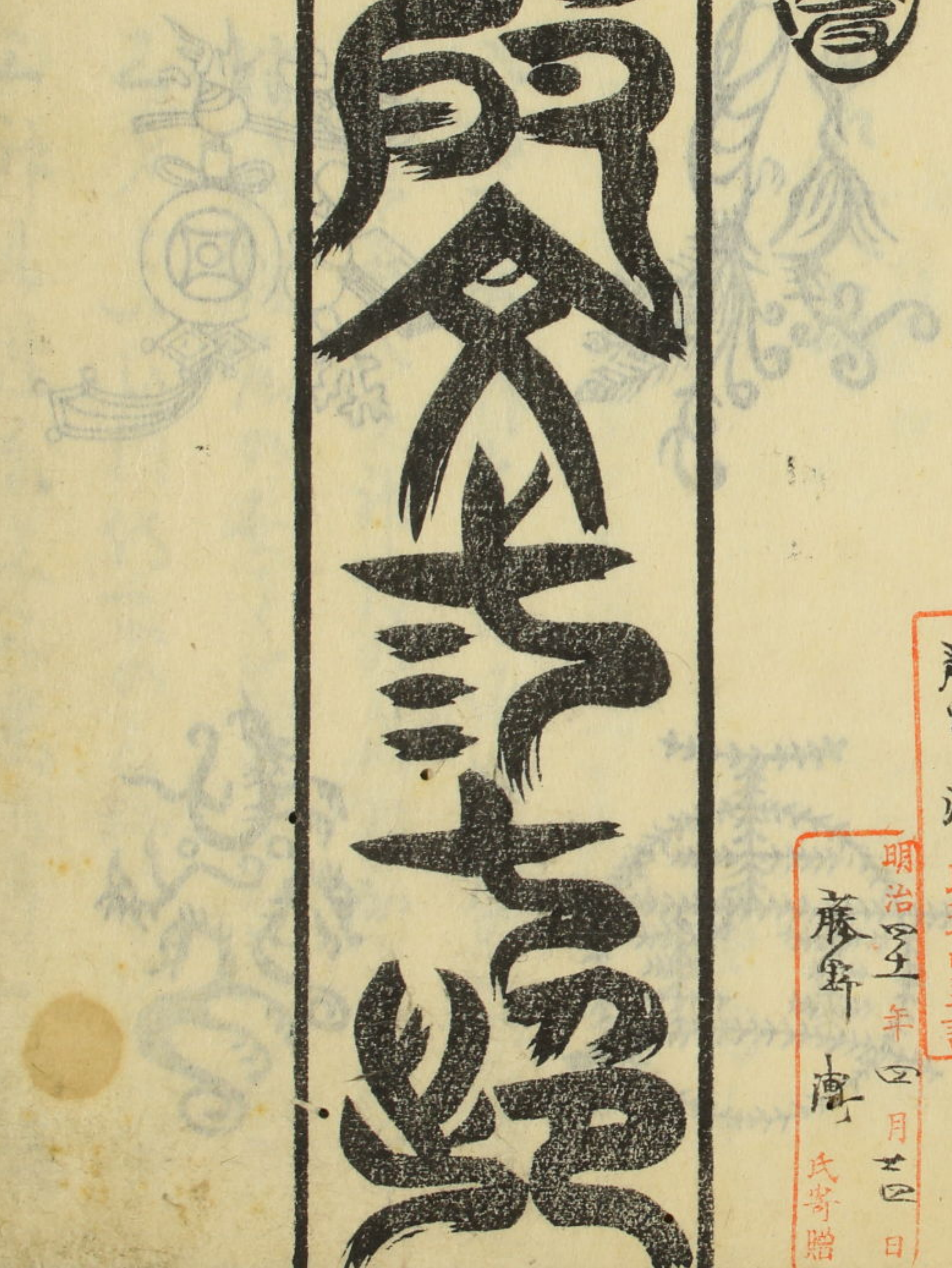


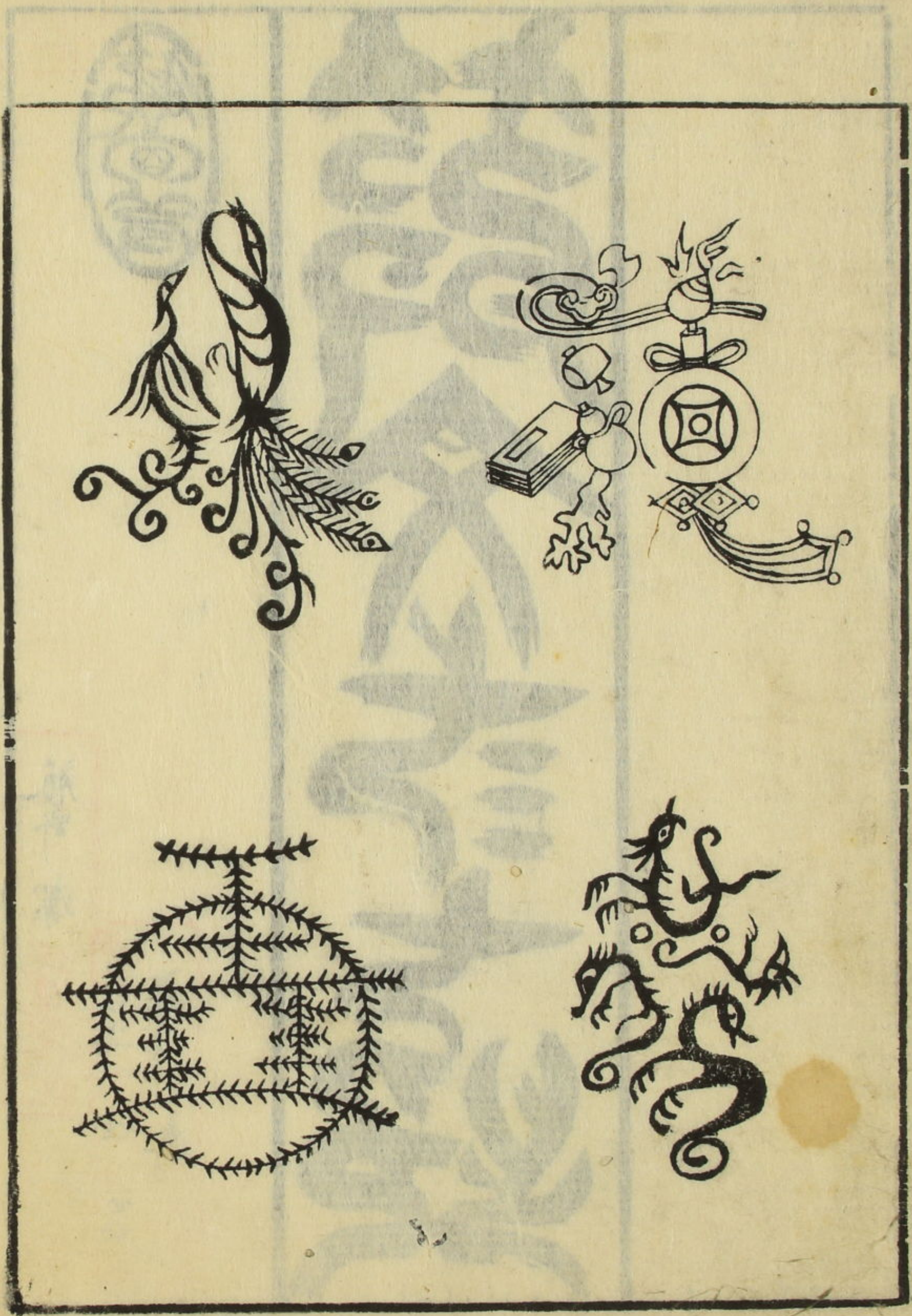
藤野先生遺愛記

藤野先生遺愛記

明治三十五年四月廿四日

藤野先生遺愛記





巻八文集

序

八巻南

八百巻の神をらむ水野麻の八の巻を
 振るもつはと神のふぬおしつら
 は一の櫃居のをとあて、天地人を
 こ文とらむ内はふのこ種といふ神の
 こ神も運ぶふとあて、あて、あて

後清よりこの世よりこれ草紙の事なれば
 こそ此の世よりこれ草紙の事なれば
 草紙の事なればこそ此の世よりこれ草紙の事なれば
 こそ此の世よりこれ草紙の事なれば
 こそ此の世よりこれ草紙の事なれば

一
 一
 一

如月日



人日 鳩亭
 新行

庵入

ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす
 ちとむのまはれをわらわす

水胡

三

六月とやいふくまの酒一斗午
ふくまの酒のちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて

とくもやうな屏風の二枚打
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて
おんまのくまのちれりて

おんま

おんま

あうりよ二階の屋敷にひらひら
と味路よえ人物のまゝに
お筆も巻の梅玉のこゝろ入
と深よとに茶籠より新
藤牙のまゝのりこゝろ入
これ官村の奥よとる登井
仲よと相よとあつた月の新
終末のつとむつたる相

梅のつとむつたる相
積のつとむつたる相
目よと入のつとむつたる相
あつたのつとむつたる相
あつたのつとむつたる相

初午

利發入醫門の人を祝して

ちの午よこはは縁のそらうー_{色直者} 取う那 _{玉羽}

初午や下向を研ふてそら直 _{柳後園} 昔仲

初しよやゆき梅より奈の飯 _{山只}

ちの午やちよ坂の宮と暮年縁 _{山縁} 石鏡

ちのしよよ下京れそらとさうー_{車中} 水胡

初午や都の侍をれ_{石虎亭} 高きや _{高き}

ち代

ち替りやちとれう_{武後} 初言

ちかりうよと_{浪陽} ちよはせのまは_{花子}

ちかりや_{石動} ちよは_{方聖}

ち替りや_{越府} 子旬_{收的} ちよは_{連中}

ち代や_{連中} 初職_{送英} ちよは_{送英}

ち替りや_{連中} 比丘_{送英} ちよは_{送英}

上巳

雛のころん堀よるくまのや

金城

徒昔

仲くよふくや橋と雛のま

山崎

きくのもや雛の歌石帯

大正

雨芝

曲あよそらくほまやまの歌

全

柳

こま月のむいあまらやまの歌

七尾

毛布

ちのち解まにたを解くから

七尾

毛布

一不帯通貝をぬふ下雛の歌

新島

竹風

向くりよあまの宵あり春の歌

全

山布

柳まきやうらちわさつ午の歌

松

新島

吾まき解まうくと春の歌

名

馬去

桜みく十二しつとや雛の歌

全

行丁

雛のまはゆきまらるる柳の歌

建

使前

解雛やまらるるまらるる柳の歌

全

桜二

春餅や新よの合の歌

全

産平

二月

きのあふふ月そのら〜
業川 林之坊
 ちまやららの尾れりあり
尾府 巴輝
 りまやあつたふらぬ古船川
全 妻士
 佐保姫の後小きよと入りぬ
業名 秋文
 永さ日や娘さきやうの丁
河東 寧比
 行書や降るもまら下唐の毛
全 林若

北くらのぬの娘やとやあつて侍路山
僕波 兼重
 りらら波からぬ燕やまらがり
長門 危期
 誅殺よりまのまらつれや娘子の
徳弁 雲
 ねんころりまらとんまれゆくあふ
云々 依小
 りまのまらぬを頼り友支度
松本 聖方
 かくまやまらぬのふれまらる
道中 柳子
 香久山の華ふらりや繁ゆふ
白根
 りまらや大津もまららぬ
まら

子集

あふ人よありくともむるや

落橋舎

去来

あつりまぐ遊よ日あくとむるや

誰彼
野坡

あつりまぐ遊よ日あくとむるや

百河

織娘の杜きゆらや系はく

乙女

大詠を好む建くや山さく

蘇子

妹はよりまよふや

侍者

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 二川

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 九組

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 希

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 七

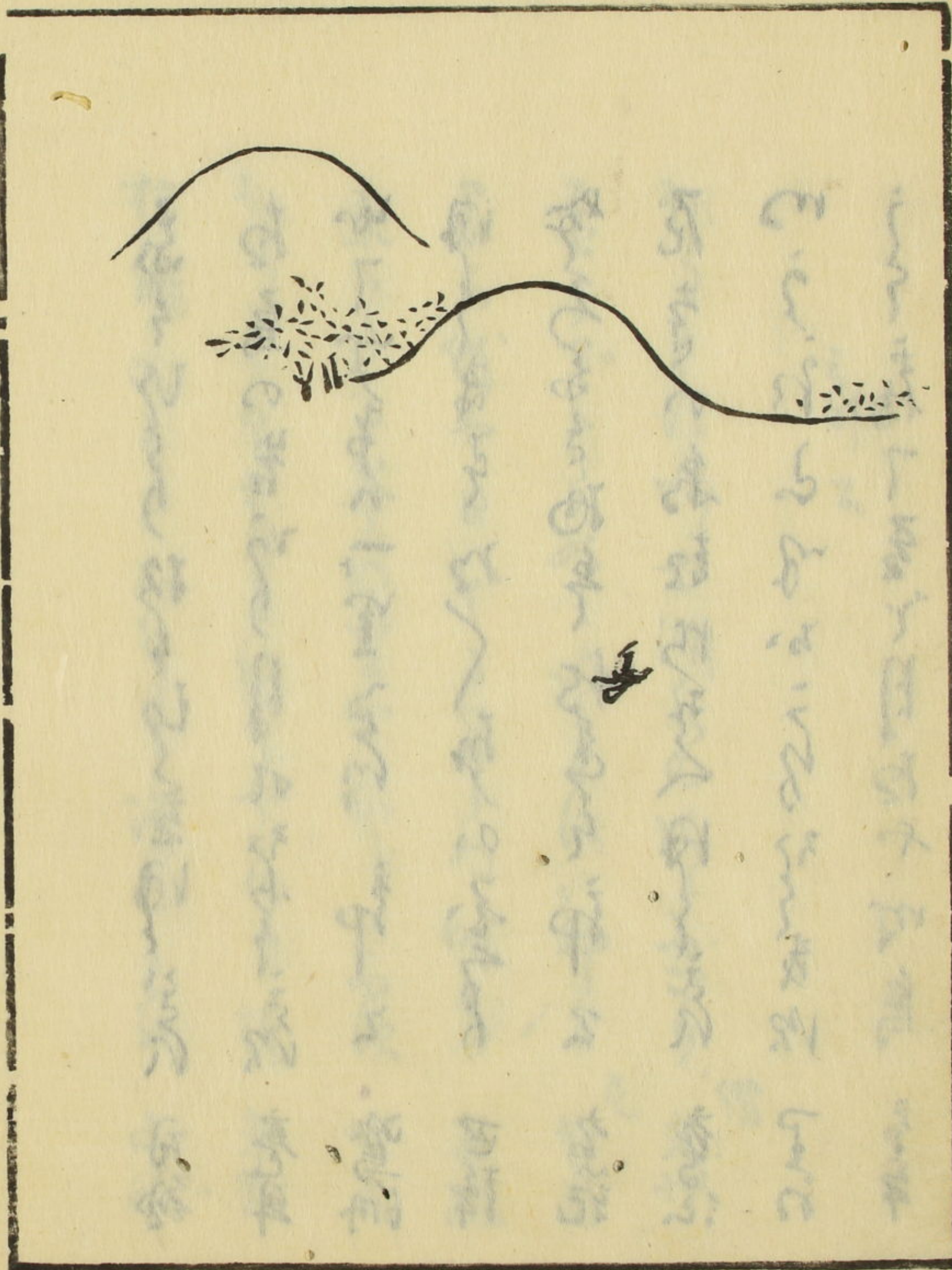
あつりまぐ遊よ日あくとむるや 三仕

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 連支

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 子

あつりまぐ遊よ日あくとむるや 子

あつり



文更

文庫社
雄分行

そののまをいふはかた

牡丹よおをむるの日記 幸平

能くは清きまをいふとついで 幸平

いまきあつたあつたあつた 幸平

梅のつぼみのまをいふ月の歌 幸平

さきの梅をむるあつたはく 幸平

最入の婦小針一と云ふもの
葉葉子の葉よしの痛きと云
揮塗ふらぬつたぐらの思あり
曲り極よきと云ふ思ふ家
置る小針はしと云ふ思ふ
那那小針の思ふや云
あつた部内物のふ行官
埃吹きくる部の思ふ
汁水と馬小針と云ふ思ふ

一本松の首のかくを言
方ふ小針葉小針はよ
さる思ふ思ふの橋橋
さる思ふ思ふの思ふ思ふ
さる思ふ思ふの思ふ思ふ
さる思ふ思ふの思ふ思ふ
さる思ふ思ふの思ふ思ふ
さる思ふ思ふの思ふ思ふ
さる思ふ思ふの思ふ思ふ

灌仲

つれづれに仲しきり御座り申

申のむと云ふ名の御座り申

清仏や頼りておぼしき御座り申

清仲やうしき御座り申

灌佛や福もよき御座り申

清仏や徳もよき御座り申

應山人

福井

金沢

常陸

下

北

灌佛や主時天人禪

清仏よ徳光の御座り申

おぼしき御座り申

つれづれに御座り申

清仲よ徳光の御座り申

徳の御座り申

灌仏や一圓の御座り申

清仲や人しき御座り申

山只

松夫

柳如

尾府

比誰

和碩

東羽

高平

鶴年

無唐屋の鳥

鳥人 惟然

言聖

眉山

福所

越府

葉名

葉名

松の山

松

許

越水

足己

伊勢のそとと何屋の

松の

松

山

車中

馬

鳥

鳥

八松

伝説の中へはまゝのふか月を 今澤 牧亭
 さしづけやねあまのまはしほれ 松竹 二竹
 めしるや月のまはしほれ 露の露 四七
 けしる色のけしるや五月雨 まのけ 如水
 め月るやけしるけしる 東門 伝説
 ぼくしる 馬心 白推

八あやま 氷 八松のまはしる川 野力
 松のまや松のまはしる まの 五趙
 八松の中のまはしる 七尾 松竹
 まみもわやまはしる 大正寺 馬籠
 けしるにまはしる 名古松 丁牧
 か月るまはしる 全 竹松
 八松とまはしる 右松 二松
 八月るや八松のまはしる 右松

涼

人前の余はく涼竹の中神風館

ものゝ涼竹瓶の玉環より全伝

涼うきや押さあさるる草と妙和伝

まほしきとねとねくあつく涼る目石動

芭蕉よふびねよ涼すや園女中全

清あはれやねもよの涼る母伝

三日市

も梅く月とささくやなると和

とくせのまてらけやくや巻あう以耳

蚊やう嬉ぢ家在中よ涼る新傳

毎れあふよ方丈とくたるとんん一字

あーけや軍も娘まは天の河世村

お娘の娘く楽屋よすくさ教

お撲さうもさくのゆきく涼哉連中

名高の神よ剛をきとくアス吳井

神文

十八

不能もさし一石のあふたまふ二
留の留あし袋ありのあけ
行灯とあゆるとまじりのあけ
波瀾くるとまじりのあけ
ほしーとまじりのあけ
別をわつ子のあけ
まのほとまじりのあけ
お仲の証者二字筆字

あふして内侯とあゆまのあ
人目とまじりのあけ
恒廻とまじりのあけ
まの日はとまじりのあけ
孫および川のあけ
あふとまじりのあけ
あふとまじりのあけ
あふとまじりのあけ
あふとまじりのあけ

けつあゝあゝとふりて管を吹
 ち工の産よ娘のお侍
 あづき餅を食ふうさおかくて
 大煙の町を都戸を懐き
 小原よ月おふれよたん
 村よまゝあゝ田舎の里あり
 思ふ心小徳者のらく梅は
 足跡ふみあとよお人あゝお家
 ち草

ちう〜のうさよのうさよ
 二階とちうちうさお
 田舎のうさおのうさお
 ちうちうとちうちうさ
 ちうちうちうちうちう
 ちうちうちうちうちう

躑

一ちりり人初うねるいとり哉 高白

登ゆいし人の子孫留て躑ふ 茂枝

所うて踊ふやうな名いふ 希白

暁の後ふ尾ちの踊ふ 一室

加賀のうとふふん夫のかうりま 善白

必法所ふのまてり踊ふま 山朴

踊ふや新平のまてり 女中 兼春

文らねや鴨もおどりふ 立河 兼下

七化の奇と曲をたふ踊ふ 那 里江

小振子よ盡ちけの初又も踊ふ 北方 善白

不振子も和歌志れ子のまてり 兼知

君は又も京卦はよたてり 兼知

踊ふこころをうたふ 兼知

を分い麗うてんを躑ふ 兼知

躑

躑

神傳

月とまじりてあしひくもくもく白根下の草木周

神傳よまのほろちやまの所神傳

まの香やまのまのまの巻身

餅つりあはれもあつりまのほまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

神傳

神傳

神傳よまのほろちやまの所神傳

まの香やまのまのまの巻身

餅つりあはれもあつりまのほまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

神傳

神傳

月や雪のうらまのころき其角
川はさ島とあつく月る家 本庄 松風
花月や急く白のゆりいけ ねね
くつ月もに糖ふや雪のふらり 昔仲
花月や別保縁の雪も霜の中 花雪
雪下澄じま方々月の影法師 凡曲

冬下りの雪のふらりいね本橋 互越
雪のたしり雪のくし雪のくし雪の月 藤徒
雪のくし雪のくし雪のくし雪の月 子潮
くし雪の雪や雪のゆらり 以之
雪のゆらり雪のゆらり雪の月 巴菴
雪のゆらり雪のゆらり雪の月 以之
蓮師も雪のゆらり雪のゆらり
梅も雪のゆらり雪のゆらり
雪のゆらり雪のゆらり雪の月 以之

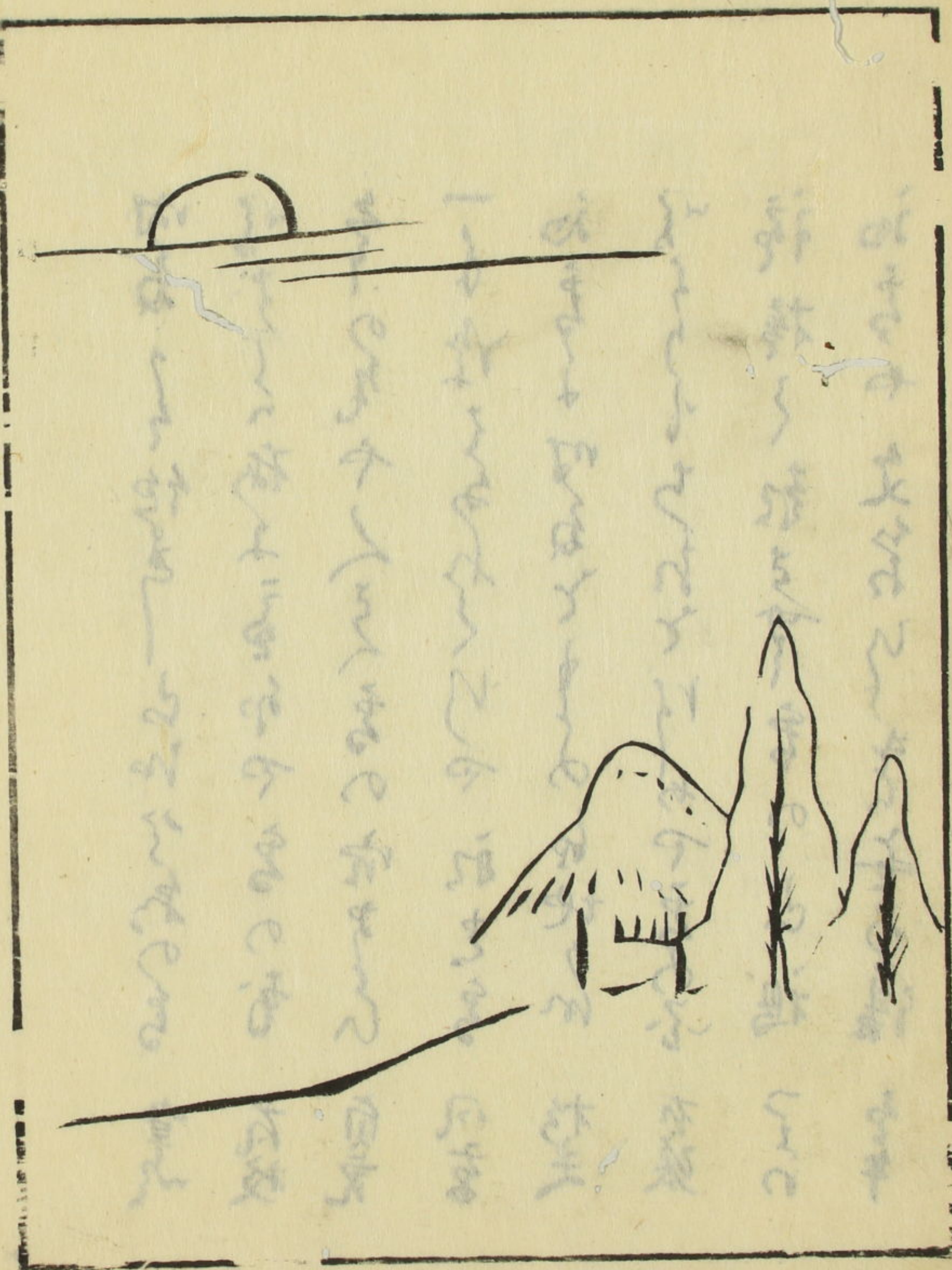
書

鴉のほろろのまふくしとちのまふくし門 東花坊
ちかちかちかちかちかちかちか 岐陽
ちかちかちかちかちかちかちか 高松
鴉神一人とちかちかちかちか 方望
ちかちかちかちかちかちかちか 甚嘯
ちかちかちかちかちかちかちか 昨暮

ちかちかちかちかちかちかちか 草次
ちかちかちかちかちかちかちか 花枝
ちかちかちかちかちかちかちか 貞克
ちかちかちかちかちかちかちか 風香
ちかちかちかちかちかちかちか 杉夫
ちかちかちかちかちかちかちか 石次
ちかちかちかちかちかちかちか つよの
ちかちかちかちかちかちかちか を午

鳥

鳥



初時雨

初時雨
鐘の音

井ノ原

花と初時雨の小ねや花の
 子もさきよきうきうと
 春の心は雨のしほり
 花と初時雨の小ねや花の
 子もさきよきうきうと
 春の心は雨のしほり
 花と初時雨の小ねや花の
 子もさきよきうきうと
 春の心は雨のしほり

井ノ原

井ノ原

神のあま

推柳のるまろくろく ^{ホユラ} 老翁くふ ^{長むき} 芦文
柳まろ 龍皇の治屋 ^一 神のるま ^{東宮}
後宮もまれまろくろく 神のるま ^{東宮}
琴鳥の仔まろくろく ^{本名} 神のるま ^石
まろくろく ^一 神のるま ^{松宮}
まろくろく ^一 神のるま ^{九相}

まろくろく ^一 神のるま ^{竹林}
まろくろく ^一 神のるま ^{竹林}
おまろくろく ^一 神のるま ^{水石}
柳鳥のまろくろく ^{山源} 神のるま ^{馬岐}
まろくろく ^一 神のるま ^{梨雪}
まろくろく ^一 神のるま ^鹿
神のまろくろく ^一 神のるま ^鹿
おまろくろく ^一 神のるま ^鹿

神のあま

神のあま

餅搗

正月のこもろや餅の青羽山 柳埴園

まらうー東海乃まらうの音 以之

餅搗や牡丹の柳子のまら男 東羽

しーの柳さうきー餅の音 御机

もらうまら木鬼眼ー音の坊 蓮文

餅搗の口やそとものいゆさ 大池 字推

餅搗のしーも音の音 柳

様のおとね 餅の音

餅搗の音 水胡

餅搗の音 東新

餅搗の音 呉井

餅搗の音 吳島

餅搗の音 柳園

餅搗の音 音平

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 7 lines of text.

Handwritten text in Arabic script, possibly a signature or a specific heading.

東寺町二条下
橘屋活字衛板

Handwritten text in a cursive style, likely a signature or a short passage. The text is written vertically on the right page of the manuscript. It appears to be a signature, possibly reading "橘屋活字衛板" (Kichijaya Katsushichi Eban) or a similar name, written in a highly stylized, cursive hand.

